
不幸のハロウィン

桐生結奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸のハロウィン

【Nコード】

N52160

【作者名】

桐生結奈

【あらすじ】

上条当麻は夕食の買出しに街へと出かけた。その町並みがハロウィン一色になっていることに感慨にふけ、空を見上げた。そのまま歩いていると、前を歩いていた女の子にぶつかってしまう。その女の子とは

魔術と科学が交差する時、物語は始まる

。

（前書き）

禁書の小説はこれが初めてです。世界観など全く分からないと素人ですが大目に見てあげて貰えたら嬉しいです！

わたくし、上条当麻は『学園都市』の高校生にしてレベル0のランクを持つ人間である…。 って虚しいじゃんかよ！夏休みから始まったおかしすぎる現象は未だに続いており、 秋も深まる今日この頃、ハロウィンが近づいていたりするのだが、もちろん何かあるわけでもなく、ぼ っと歩いていたりするのであった。 本当は夕食の買出しなんだが。

「すっかり、街はハロウィン一色だな…」

ジャック・ランタンのカボチャの飾りを見ながら溜息をつく当麻。学園都市はイベント好きの都市らしい。らしいというのは、とある事件により当麻の7月30日以前の記憶が抜け落ちているためである。

そう、 彼は記憶喪失なのだ。 それでもある少女を哀しませたくない思いから記憶が無い事実を隠し、 今日まで生きているのである。それはとてつもない辛さがあつた。 記憶があればハロウィンの楽しい出来事も思い出せただろうに、 今は何一つ覚えていない。

「ハロウィンにちなんで、カボチャ料理でも作るか」。 インデックスも喜ぶだろ」

ぼけっと歩きながら呟く当麻。 インデックスとはイギリス清教のシスターで当麻の部屋のベランダで出会った少女にして哀しませたくないために事実を隠している当人でもあつた。

空を見上げればゆるゆると雲が浮かんで動いていく。 見上げたままぼ っと歩いていた当麻は前を歩いていた女の子にぶつかってしまった。

「きゃあっ!？」

「おわっ!？あ、すみませんっ!！余所見してしまして…」

当麻はすぐさま謝った。いたたっとお尻を撫でながら「なんなのよ…」とグチりながら立つ女の子。そして女の子が当麻を見た瞬間、

「なんで…アンタがここにいのよっ!？」

と叫んだのは、学園都市第3位にして超電磁砲>レールガン<の異名を持つ 御坂 美琴 であった。

「…なんだ…、ビリビリかよ…。かしこまって損したじゃねえか」
相手を見た瞬間、当麻は溜息をして呟いた。

「な、なんですってえっ!？人にぶつかって置いて、出る言葉はそれなわけ？」

バチィッと美琴は放電する。その電撃は道のタイルを砕いた。

「おいおい、公共物を壊すなよ…。それにここで電撃を出すなんて。歩行者の皆さんの妨げになっちゃうだろうが」

呆れ顔で注意をする当麻。無論美琴にはその言葉が無性に腹立つもので今にも全力で放電したい気分だった。

「うつさいわよ！アンタが女の子に対するマナーがなってないのが悪いんだからね!！」

「はいはい、すみませんね。よそ見してたわたくしがわるう御座いました。これでいいか？」

「…アンタって、人を怒らせるのが得意みたいね…。受けてた

とうじゃないの!!!」

そう言つと美琴はバチイツと当麻に向かつて放電した。電撃はまっすぐ当麻に向けて放たれた。がしかし、当麻は右手でそれを打ち消した。

「あ、あぶねーじゃねえか!? さすがの上条さんも不意打ちにはびっくりして当たるかもしれないだろ!?」

「しっかり防いだくせに! つけあがつてんじゃないわよ!!!」
更に威力をあげて電撃を放つ美琴。放つと同時に辺りは停電してしまった。夕方なのでまだそれほど影響は出ていなかったが状況はかなりヤバかった。電気に関わるものは全て使えなくなってしまうているので電気が点かないなどの影響はこれから出てくるだろう。

当麻は美琴に怒らせないよう優しい口調で言つた。

「おーい御坂さん? これくらいにしとかないか? そろそろ風紀委員>ジャツジメント<や警備員>アンチスキル<が来ちゃうぞ? だから…」

当麻が言い終わらない内に遠くからサイレンが聞こえた。その音に美琴も賛同する他なかったらしく、2人はその場から立ち去つた。

「はあはあっ…何とか間に合つたな…。全く、お前に会つとろくなことねえよ…。何で全力で逃げなきゃなんないんだよ…。不幸だ…」

「そ、それはこっちのセリフなんだっから…ね…。はあはあっ…。なんで私の電撃が効かないのよ…」

「だから、この右手にはだなあ…」

「あっ!!!! もうこんな時間!? 急いで帰らなくちゃ!!!!」

当麻の言葉を遮り美琴は時間を見て帰路へと急ぐ。振り返って、

「次は絶対勝ってみせるからね！！！！ 覚悟しなさいよ！！！！」
びしつと当麻に指差し、帰って行った。その態度に当麻は溜息をつきながら、「はいはい」と気の抜けた返事を返したのだった。

> i 1 3 2 2 9 — 1 6 9 5 <

そして部屋に戻ると、玄関先にインデックスがニコニコと満面の笑みで待っていた。当麻は凄く嫌な予感を察した。そして顔から冷や汗が噴きだしていた。やるべきことを今思い出していたのである。

「た、ただいま戻りました…。インデックスさん…？ あ…こんな学生風情にお出迎え、痛み入ります…」

笑顔を引きつりながら言う当麻。次に起こる出来事を予測しているようだ。

「とうま…、今何時かな？ 私物凄くお腹減ったんだけど…？ 美味しいご飯が食べたいかも」

ニコオツと笑顔で話すインデックスの顔が次第に強張った笑顔になっていった。

「そ、そーでございますよね！ あははっ！！ えーつと…買ってきます…」

「とうま、何しに行ったんだったかな？ ねえ？ ねえ？ 教えてほしいかも」

「夕食の材料を買いに行かせて貰いました…！がいろいろありまして買い損ねました…とか言ったらやっぱり怒りますよね？」

恐る恐る答える当麻。答えながら聞き返す。その瞬間、インデックスの口は開き尖った歯がキラーンと光り輝き、その光り輝いた歯は当麻の頭を噛み付いた。

「とうまのバカッ！ 腹ペコのシスター 苛めて楽しいの？ 慈悲な
んかないんだから！！！！」

当麻の頭に思い切りかじり付いたインデックス。腹ペコの怒りで威力も2倍らしい。

「だ、だから謝っているじゃないかっ!! ふ、不幸だあ――」

その後、ネコのスフィックスもインデックスと共に当麻にかじりついたのは言うまでも無い。

END

（後書き）

短編なのでこれで終わりです。楽しんで頂けたら光栄です。感想あれば嬉しいです。

次のステップの参考にさせて貰いますので宜しくお願いします。
最後まで読んで頂き有難う御座いました。

P S ・新たに書き足してみました。ハロウィンの要素があまり増えませんでした…。っもうしわけありません…。！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5216o/>

不幸のハロウィン

2010年11月11日07時00分発行